

「ふれあい」

校長 二瓶 晃一

昔のことで恐縮だが、七年前の三月六日のことである。当時の私の勤務先に二十数年前の教え子（A君）が電話をよこした。

A君は新聞で、今度、小高商業高校の校長になる予定であると記載されていた私の写真を見て、電話をよこしてくれたのである。

彼は開口一番、「先生のことを懐かしくて、俺のこと忘れてっかかもしれないと思ったけど電話したんだ。」と言ってきた。

彼は、私のクラスの中で手の掛かる方の生徒で、もちろん忘れるはずはない。

彼は、優しく素直な面もあったが、先生に対して反抗したい気持ちも強く、校則違反を何度か犯して指導を受けたこともあった。卒業することも出来ないのではと心配したこともあったが無事卒業できた生徒である。

そんな彼が電話を切るときには、「先生、頑張って校長やってね。短気だから気を付けなよ。じっくり人の話を聞くことも大切だからね。」と私にアドバイスをくれた。

私が彼に対して何か特別なことをしたから、彼が私のことを覚えてくれていた訳ではない、と思う。ただ、月並みなことだが、私は彼を卒業させたくて一生懸命に愚直にやっていただけである。

学校は人と人とのふれあいの場でもある。生徒同士や生徒と先生など様々なふれあいがある。そこには血の通った心と心の交流が必要だ。

私は、勝手ながら自分の教え子たちと心と心のふれあいがあったと信じている。

本校においても生徒と教師の心と心のふれあいがあり、両者の心に何らかのものが良い形で残る教育が実践されているはずである。